

フレーベルに學ぶ (承前)

大塚喜一

『両親たる者は其兒童の助によりて自分の缺陷を補ふべきである……』

前に掲げたこの譯語の箇所は相當する原書 Froebels Menschenenerziehung, herausgegeben von Haus Zimmermann, Leipzig Verlag von K. F. Koehler 1913 の第四十二節(五十五頁)の本文は左の如くである(諸賢の研究に資せんが爲にこの節の全文を記す)。

Väter, Eltern! was uns mangelt, auf, lasst⁽¹⁾ es uns unsern Kindern geben, verschaffen; was wir nicht mehr besitzen, die alles belebende, alles gestaltende Kraft des Kindeslebens, lassen wir sie von ihnen wieder in unser Leben übergehen! Lasst uns von unsern Kindern lernen; lasst uns den leisen Mahnungen⁽²⁾ ihres Lebens, den stillen Forderungen ihres Gemütes⁽³⁾ Gehör geben! Lasst uns unsern Kindern leben⁽⁴⁾: so [110] wird uns unserer Kinder Leben Friede und Freude bringen, so werden wir anfangen, weise⁽⁵⁾ Zu werden, weise Zu sein! —

父達よ、親達よ!。我等に缺けたる所のもの、それをば我等の子供達をして我等に與へしめよ、供給せしめよ。我等が最早(既に)持たざるもの、すべてを生かし(魂を與へ)すべてを建設する兒童生活の力を我等をして彼等(兒童達)から再び我等の生命(生活)の中に移り込ませしめよ。我等をして我等の兒童達から學ばしめよ。我等をして彼等の生活の聲低き

(靜かなる、優しき) 勸告、彼等の心情の靜かなる要求に謹聽せしめよ(耳を貸さうではないか)。我等をして我等の兒童達
と俱に生活せしめよ(我等は子供と俱に生きやう!)。斯くして我等の兒童達の生活は平和と喜悅をもたらす様に
ならう。そして(その生活を通じて)我等は賢く爲り賢くある様に爲り始めるであらう。

註、

(一) lasst uns は英語の let us に當り、「我等をして……せしめよ」「いふ意と共に」「……しやうではないか」「いふ願望
の意をも含む。以下「……せしめよ」を譯してあるところを斯かるあたゝかきフレーベルの呼びかけの心を以て解せられた
し。

(二) Mahnungen の動詞 mahnen は「思出させる、注意する、促す」等の譯がある。表面に明かなる要求としては訴へ
ないが、しかし子供の下意識の深き層より彼自らも意識せざる程の聲低き靜かなる呼びかけがこれを聴く耳ある者には衷
心の切なる要求としてひびいて来る。

(三) Gemüts. 情意、具體的心情、最内部の心。子供の本心、童心、童心の動きに應じその眞の要求を充足せしむる事
こそ我等の本務である。

(四) 斯くして「子供を俱に生きる」事は、子供を生かすと共に、この生命の感應の中に我等も生かされる事となる。この
「子供」「我等」は何れか一方を主とするのではなく、兩者共に能動的であるところにフレーベルの眞意が存する。(英譯

Let us live with our children Note: "with implies that both, we and the children, are equally active".
Education of Man. translated by W. N. Hallmann p. 89)。

(五) weise 悟を開きたる、分別ある、思慮ある。子供と俱なる生活の中から、平和と喜悅がうまれて来る様になれば

我等はやがて子供の世界の消息を悟り始め、子供に對して思慮分別ある、即ち子供から理解ある友を感じてもらへる様になるであらう。それが我等が眞に賢明になり、(純化の過程)又賢明である、(我等に養はれたる内なる性情)様になる始である。

斯くしてこの節の終までよく讀めば、『兒童の助』なる始の言葉に内包さるゝ合著豊かにして滋味したゝる内容が深く味はるゝに至る。

この譯は、恩師K先生の御宅に參上し又特にフレーベルの研究について京都市保育會として御指導を仰ぎつゝあるI先生を研究室に訪ひ尙近年獨逸留學より歸朝せられたるO助教授を研究室に訪ひ、何れも原書に就て親しく教を受け、更に學校の教員室にてS教授の意見を聽き等して漸く書きまごめたるものである。

次に、原書のこの箇所に披瀝せられたるフレーベル先生の意を存するところに學びつゝ、「母たること」の眞義に就て考へて見たいと思ふ。

精神上の母たること

『苟くも幼稚園の保姆たる人は自分の子を育てた人であつてもらひたい。肉親の子を有する人は、幼兒に對する愛情が、こゝろなく濃やがである』といふことを、小生は嘗て或る經驗ある人から聽いたことがある。

この言には確に一理あることは何人も首肯する所であらう。しかもそれなるが故に、肉親の子を有する人は之を有せざる人に比して常に保育上優れた働きを實際に爲してゐることは斷言出来ぬ。そういふ場合が多いではあらうが、すべてではない。何しなれば「人の母たる」偉大さは、單に子を産むのみならず産んで育てるこゝろ生活體驗の間に處して母自身が教育者として又人間として鍛鍊せられ深省せしめられる點があるからである。母となつてその愛兒を育てゝる間の人生の

諸經驗を通じてその「母」自身が如何に醇化せられ陶冶せられて行くかによつて、現實の「母」の種々相を生ずるに至る。吾人は

山は焼けても山鳥たゝぬ……………

なる歌を思ふ毎に、親子の愛が如何に言語に絶したる強き力あるものなるかに讚歎措く能はざる者である。この愛が強ければ強い程、我子への一途に純なる献身の行は、後天的修養努力等にては到底及び難き偉大にして崇高なる姿を現すのである。しかしこの禮讚の辭は吾人より母親に捧ぐべきものであつて、一度母たる人自身の問題となれば、斯くも強き本能愛の醇化にこそ眞の母の絶えざる忍苦が存するのであつて、本能愛の強き程この忍苦も亦大なるものを要する筈である。人情としての愛を殺して醫學の法則に従ふ事が眞に子を愛する道なる場合もある。學校の修學旅行にさへ我が子を出しかねてゐる母の心配、その情に於て有難い感はあるが、天までも伸びんする旺盛なる生長力を阻止する結果となることは遺憾の極である。己が心の弱きを歎する時、母よ眼を轉じて、我國の史實に就て學べ。古來わが日本には、鍛鍊の精神を以て我が子と俱に人生の苦闘に直面し、たゞひたすらなる無我盡誠の努力を以てその子をして高き理想に到達するの勇と忍との徳を養ひ得た聰明なる母が稀ではなかつた。是等の例にて明なる如く、生理上の母がその先天的素質（良教育者たる根本となり得る素地）を陶冶して精神上人格上の眞の母たり得るまでには、人間のみに存する向上醇化の正道に日々念々に精進するを要し、斯く小なる愛を殺して大なる愛に生きるまことの道によつてのみ母性愛は甫めてその本來の尊き姿を現はすのである。斯る向上醇化はその人の性情に根ざす求道心より發するもの故短時日にして成るにあらず、その淵源は母となるよりず、以前の處女時代の性情と生活習慣、環境の感化等の中に徐々に形成せられ來つたものである。故に、良き母たらむにせば先づ良き娘たらねばならぬ。殊に心の動搖し易き青年處女期に於て私慾に克つの生活習慣

は最も必要である。

青年期女子の現在の生活殊にその乙女らしき心情の動きが、將來の母としての生活に如何なる形態に内容を以て生長發達して行くものであるかは、吾人の最大關心事であり、現在偕に學びつゝある生徒達の「お互の教育」(前號四一頁)の中に此間の消息に通じなければならぬと思つてゐる。それを本誌として、斯道先輩諸賢の教を受け東西古今の學說に徴して慎重に研究し以て眞實の道を明徴にするは、今後大いに努力すべき重要事である。本誌に執筆せらるゝ斯道諸大家にして諸賢の人生體驗に専門の御研究により此問題に就ての御意見を寄稿せらるゝ事は、我國幼兒教育の機關雜誌としての本誌の特質的使命に貢獻する所多大なるを信じ、諸者諸氏に俱に謹で期待する次第である。小生にしても卑見を披瀝して諸賢の御批正を仰ぎ度き願切なるものがあるがその一般的なる所説は他日に譲り、こゝにはこの稿の中心目標たる『精神上の母たるこゝに觀點を置いて此問題に向つての一視角よりのヒントを呈示したいと思ふ。

前號にフレーベルの説を紹介したる中、

「幼兒の生命に女性の心情は其の本質に於ては「一である」(四三頁)

云はれて如何にもさうだと思はれるのは、保育實習生が始めて幼兒に生活を俱にした際の潑刺たる精神的火花により、心ゆくばかりに楽しくも純なる生命の感應をなしたる多くの生ける事實である。今その感想の一例を左に御紹介せむに於るに當り特に本誌の讀者に御注意を願ひ度きは、斯くして處女時代に幼兒の生命を合一する事により漸次人の母たる品性の素地が若き日に於て涵養せらるゝ事である。それは特に將來の爲さいふよりも寧ろ現在の乙女心に最もふさはしい自然にして樂しき生活經驗であり、斯くして重心の光に生きる生活實感こそは實に保母たるにふさはしい心情のつきぬ泉である。吾人が前號よりの稿を通じて讀者に俱にフレーベルに學びつゝある「我等に缺けたる所のものを我等の子供達をして

我等に與へしめ、すべてを生かす兒童生活の力を吾人の中に兒童達から移し込まむとする態度こそは、實に保姆の修養並に養成上最根本の基調である。讀者よ、何卒次の感想文の中よりこの心を得得せられむ事を乞ふ！

○
待ちに待つた實習生活がいよ／＼やつて來ました。

明日からは幼稚園に行つて幼き子供達の友達として幼な兒と偕なる生活をするのだと思ふに、わけもなく胸がさわぐ。落つて眠られない、たまらなく嬉しいのだ。けれど同時に、そつと私自身を省りみずには居られなかつた。

私の様なつまらない足りない人間が、あの聖い幼な兒の友として一緒に遊ぶ事が出来るだらうか。それよりも、あの美しい純眞な魂に傷をつける様な事が無い様に、その方が大きな問題となるのだつた。二年生になつた喜びも子供に接する喜びに溢れる胸を抱いて感慨無量の中に幼稚園の門を潜つたのも「先生」に云はれて穴でもあつたら入りたい氣がしたのも数日以前の事となつた。そして、實習生であるといふ意識も薄らぎ、附添人やお母様方に對する意識も追々淡く何もなく思はれる様になつて來た時、同時に、幼な兒に對する感情がよほぎ變つて來た事を感じた。あらゆる感情が子供たちの上に集中されてしまつた様な氣がする。私は感じさせられた。子供の世界はちつとも空虚がないのね、と。私の心の底にいつ／＼潜んでゐた穴のあいた様な思ひが、子供との生活によつてすつかり満たされたのだ。さうだ、だから、毎日がこんなに嬉しいのだ、そして快活になれるのだ。

子供達のおかげで、私は毎日こんなに楽しく送る事が出来るのだ。

私は家中でも一番陰氣な性質で何時も額に皺を寄せてゐるといふ始末だけれど、此頃ではすつかり快活になつた。そして萬人向きのする様になつたこと云はれる様になつた。来る日も／＼とても愉快です。殊に幼稚園で子供と遊んでゐる時は

どんな事も皆忘れ果てる、ほんとうに氣持のよい軽い氣分になつてゐます。

幼稚園は朝早く行くもの、幼稚園が段々に始められて行く何きも云へないあの時の氣分、一番大切な時である事を経験した私は毎日早く登園する様になつた。それでも大きい組の子供たちは随分早いので私より先に二三人は來てゐる。私の足音がするに積木を捨て、おいて「先生が來やはずだ」「飛んで來て私を迎へて呉れる。何きまあ威勢のいゝ聲だ。私は何きも云へない嬉しさ幸福さに浸るのだ。毎朝々々こんな新鮮な氣持で潑刺して私を迎へて呉れる者が他にあるだらうか。子供達の元氣のいゝ「先生お早う」を聞くに胸がすつこする。いろ／＼の思ひはこの聲で消され、新しい一日の希望、人生の明るみが開かれる様な氣がする。こんなに氣持よく明るく私の一日のスタートは子供によつて開かれるのである。何て幸福な私だらうか、感謝しなければならぬ。日一日に幼児に私は親しみ深くなつて行く。私の様な者でも仲よしのお友達になつてくれた事を子供に心からお禮を云ひ度い。新緑の薫りが心地よい風に送られて來る。早く來た二三人の子供に手を引かれてお庭に出來る。「先生お滑りしよう、滑れる様にして頂戴」誰かと言ふ。子供達一しよに板を敷く、今日の外遊びは先づこゝから始められる。この中段々登園する。姿も見えないのに聲だけが曲り角の向ふから聞こえる。「先生、お早う」バタ／＼と馳けて來る。何時も元氣な日ちやんの聲だ。私がお庭に居る事を室内で先生に聞いて來たのに違ひない。こんなにして私の傍に飛んで來てくれるのだ。「先生僕ん」今日から鯉職立てはつたよ、「僕ん」も大將さん飾らはつたよ」潑刺たる活氣に充ちてお話をしてくれる子供達にきりかこまれて、私は心地よい朝の片時を何きも云へない幸福に光榮の中に送る事が出来るのだ。

何につけても眞剣な態度、すべてが美しい姿、聖いものである、眞に敬服すべきものを感じさせられる。

體に登りつきに來る子供、手をひつぱりに來る子供、肩につかまる子供、泣いて私の傍に走つて來る子供、鼻液を汗を

を私の洋服に残して行く子供、喧嘩の味方にミ呼びに来る子供、みんなく可愛く好きなく私の子供である。幼稚園で過す間は僅かであるけれどもそれだけ私の生活に明るみを與へ悲しみを慰めて私を幸福にしてゐる事だらうか。そして幼児無くして私の生活も無いといふ事を此頃切實に感ずる様になつて來た。子供あるおかげで潤ひのある生活をし、希望をもつて送つて行ける私は幸福だ。

靜かな片時、ふきこんな事を思つて見る事もある、若しあの可愛い幼稚園の子供達が居なくなつたらさうだらうか……：：そしたら私もキツト居なくなつてゐるだらう。今の私の生活と幼児とは離す事が出来ない關係に結ばれてゐる事を感ぜずにはゐられない。若し今、私から幼児を取り離されたならば、何によつてこれを補ふ事が出来るのだらうか。思つても恐しい感じがする。兎に角、幼な兒なくして私は生きて行けない云ふ氣がする。幼稚園で遊んでゐる時は、みんなく私の子供であり私の妹であり私の弟である。さういつた氣になつて生活してゐる事に氣づくのである。

そして時々、こんな子供を持つてゐられる母様方が本當にうらやましくなる。(以下次號)